

## 浦上玉堂の四字題について

学習院大学教授・千葉市美術館館長 小林 忠

江戸時代後期の文人画家浦上玉堂（1745－1820）の絵画には、多く漢字四文字（稀に五文字かそれ以上になる）の表題が付いている。それらの四字題は、ほとんど重なることがなく、一つの画題はほぼ一回限りの使用に限られているのである。

私の現在までに調べた限りでは、これまで実見してきた玉堂画と、主な画集やカタログでのみ知った作品（疑わしいものは除外した）から集められた総計307もの四字題（一部五字題）の内、複数の作品が存在する画題は僅かに24例、率としては7.8パーセントに過ぎないのである。あとの92パーセント余の四字題は、一度使われただけで二度と画題に再利用されることがなかった。

このような主題へのこだわりを見せた日本の画家を、私はほかに知ることがない。玉堂はその日に用いた四字題を手控えに記し留め、作詩した漢詩と同じようにそれらを記録、保存し、重複して用いることは一部の例外を除いてかたく抑制していたのである。一回限りの作画、それは玉堂にとってまさに、琴の演奏に似た作画というパフォーマンスだったのである。

玉堂が表題にことさら意識的であったことは、池大雅旧蔵で自らも愛蔵した中国明代の文人画帖「腕底煙霞帖」全11図の四字題を、一つも自画の題に用いていないことによっても確かめられる。その最終図「凍雲欲雪」からヒントを得て「東（凍）雲篩雪」の名画を生んではいないが。

玉堂の山水画は、単調といえば単調で、同じようなモチーフを繰り返し描き続けた。橋や道を歩みあるいはたたずむ人、生気に満ちたり枯れ寂びたりと季節の表情は変えるものの重なるように林立する木々、山中や水辺の小さな庵や四阿（あずまや）、対岸まで広がる川に浮かぶ大小の舟、煙霞にかすんだり雪に覆われた山や丘、音を発して落ちたり流れる滝と谷川、それらが詩意を伝える有効な造詣語彙となって玉堂ならではの画中世界を作り出していく。

四字題を構成する語句で頻度の高いものを選び出すと、玉堂画の趣致の偏りが見えてくるだろう。春夏秋冬の別とその推移、晴雨風雪の折々、山林、山溪を逍遙、吟行し、釣りを楽しみ、琴を弾き、また読書にふける。一晴一雨、乍晴乍雨（させいさう）、欲雨欲晴、欲晴欲雨と、陽の恵みや雲霞の移ろいを味わい、松の枝葉が奏でる風の音を愛でる。訪隠、訪友とどこか人恋しく、しかしなお夜や月、独とか幽、あるいは陰とか糶糊といったもの寂びた境地をこそ愛してやまない。老荘の隠遁思想に憧憬し、陰陽五行の自然の哲理に随って自足する。そうした玉堂の精神風土は終始一貫して変わることがなかった。

絵が仕上がるまでを見守る観者、それが竹田とか山陽とかといった良き理解者の文人一人のみであれ、地方の良き理解者とその取り巻きという多数の場合であれ、玉堂の作画ぶりにはさほど変わることがなかったであろう。まずは画題を知らせて今日その時のモチーフをそれと明かし、おもむろに筆を走らせはじめ。そのひと筆ひと筆は、楽器を奏でる音の一つ一つのように紙面を覆っていき、やがて絵の「一曲」が仕上がって終わる。そのような玉堂の作画ぶりではなかったかと想像して、私は独り楽しんでいるのである。